

写真で振り返る百年



浦和書籍館

埼玉県立図書館の前身は、明治9年（1876）に県立学校内に設置された「浦和書籍館」である。

当初は蔵書も少なく、有料の上、資料の閲覧にも厳しい制限があった。書籍館がどのような施設なのか一般によく知られていなかったこともあり、わずか10年で廃止となってしまった。



浦和書籍館閲覧券第1号
（明治9年）

県教育会立埼玉図書館

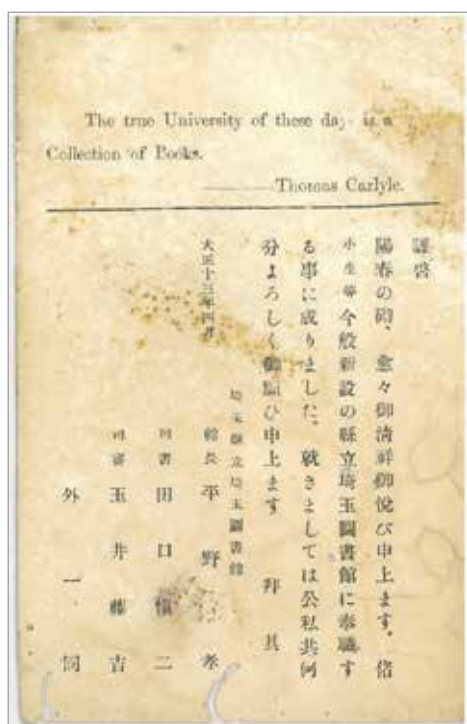


大正時代に入ると、図書館の必要性が見直され、大正11年（1922）10月、浦和に県教育会が運営する埼玉図書館が誕生した。（北足立郡工区員出張所跡地に開設。）

利用者目線の利用しやすい図書館を目指し、書架の資料を自由に閲覧できるオープンアクセス方式が導入された。今では当たり前のことだが、当時は画期的な方式であった。

埼玉県立埼玉図書館

大正13年（1924）、文部省から「埼玉県立埼玉図書館」の設置について認可を受けた。



左は、埼玉県立埼玉図書館開設の案内状（大正13年）

右は、埼玉県立埼玉図書館の館内閲覧票



埼玉県立図書館

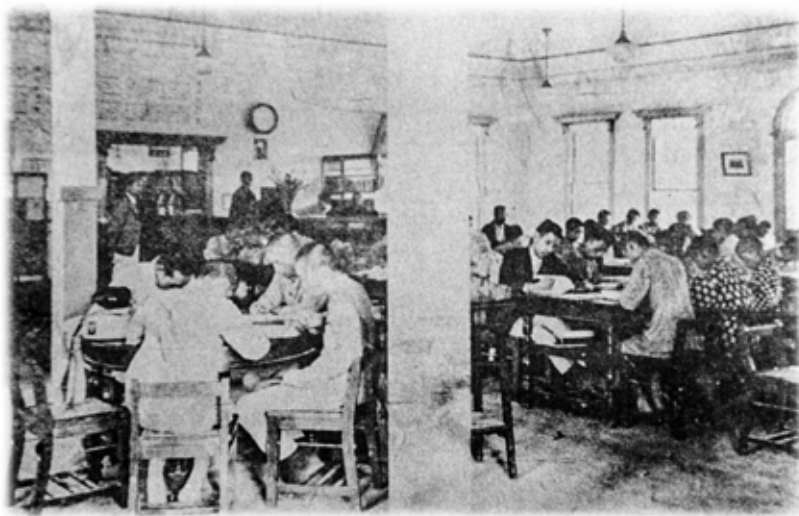
戦中、戦後の苦難の時期を経て、昭和26年（1951）3月、埼玉県立図書館設置条例の制定により、「埼玉県立図書館」と名称が改められた。

昭和28年（1953）3月には、埼玉県立図書館協議会委員が任命され、第1回協議会が開催されている。

「鳳翔閣」の羽の下で

大正14年（1925）、県教育会立埼玉図書館は、現在のさいたま市浦和区高砂に移築された旧女子師範学校の建物に移転することとなった。鳳凰が羽を広げて翔び立つさまを思わせることから、三条実美によって「鳳翔閣（ほうしょうかく）」と名付けられた由緒ある建物である。

鳳翔閣は、昭和34年（1959）に老朽化のため解体されたが、埼玉サッカー発祥の地である埼玉県師範学校の校舎として使われていた縁で、いまでも浦和レッドダイヤモンドズのエンブレムにその姿をとどめている。



利用者でにぎわう鳳翔閣時代の図書館内の様子（昭和初期）

鳳翔閣時代の児童閲覧室の一部（昭和初期）



次々に開館する県立図書館

新県立図書館の開館 (後の浦和図書館)

老朽化により解体された鳳翔閣に変わり、昭和35年（1960）、新たな埼玉県立図書館の建物が落成した。鉄筋コンクリート造地上3階地下1階の図書館は、後の昭和45年（1970）に埼玉県立浦和図書館と改称される。

左は、開館間近の様子
(昭和35年)



閲覧室の様子



落成式のポスター



開館後のにぎわい



利用案内

熊谷図書館の開館

昭和45年（1970）には、2館目の県立図書館である熊谷図書館が開館した。1階ロビーから2階を見上げると、ガラス越しに2階閲覧室が見える構造となっている。これは宙に浮く空想図書館をコンセプトとして設計されたためである。

右は、開館時のようす。開館式は当時隣接していた福祉センターで行われた。



川越図書館の開館

川越図書館は、昭和50年（1975）に3館目の県立図書館として開館した。障害者サービスが充実した図書館で、利用者が希望する資料を朗読する対面朗読サービスに力を入れていた。また、朗読した音声テープに録音し、郵送で貸し出すサービスも行った。



川越図書館対面朗読室の様子



左は、開館記念樹の「楷の木」を植える畑和知事（当時）
学問にゆかりがあることから楷の木が選ばれ、川越図書館の広報誌『楷』の名称の由来にもなった。

久喜図書館の開館

昭和55年（1980）、4館目の県立図書館として久喜図書館が開館した。これによって全国的にも珍しい県立図書館の4館体制が実現した。開館当時は周りを田んぼに囲まれ、利用者が足を運んでくれるものか不安に思う職員もいたが、開館後は予想に反して多くの来館者が詰めかけた。

昭和61年（1986）には久喜市在住の彫刻家、齋藤馨氏から寄贈された少女像（作品名「遙か」）が前庭に設置された。



レファレンスサービス



レファレンスカウンターで利用者からの調査相談
依頼に応じる司書（熊谷図書館、昭和53年）

視聴覚資料によるサービス



左は、移動図書館車に積み込まれる映写機（昭和中期）



移動図書館で本を借りる女の子（昭和中期）

時代につれ変わるもの、変わらないもの…。埼玉県立図書館のサービスについて、その歴史の一部を写真で紹介します。

レファレンスは、埼玉県立図書館が長年に渡り使命を持って提供してきた調べものをサポートするサービスである。

現在では、図書だけでなくウェブサイトや商用データベースなどから得られる情報も含めて利用者に提供している。

埼玉県立図書館は、国立国会図書館が運営する「レファレンス協同データベース」事業で平成20年（2008）から14年連続で被参照件数全国1位となっている。（令和4年12月現在）

児童サービス



熊谷図書館の母親こども室（昭和46年）

移動図書館

埼玉県立図書館では、昭和25年（1950）に導入した「むさしの号」によって移動図書館のサービスをスタートした。市町村立図書館が整備されていない地域に住む県民に本を届ける意義があった。平成18年（2006）3月に移動図書館事業を廃止するまでに県民が利用した本は、のべ1,100万冊を越える。

埼玉県立図書館は、これからも
利用者とともに
歴史を紡いでいきます

埼玉県立図書館と「ナトコ映写機」

○ ナトコ映写機の盛衰

占領下の日本において、GHQ の文化・教育施策を担当する CIE（民間情報教育局）は、昭和 23 年に文部省に対して 16 ミリ映写機の無償貸与を提案する。「ナトコ」とは、この 16 ミリ映写機のメーカー名である。これを受けて全国の教育委員会に視覚教育係が新設され、各地の図書館を中心とした社会教育施設で映写機とフィルムが活用されるようになった。

さらに 2 年後の昭和 25 年に制定された図書館法においても、視聴覚資料の整備が規定された。同法の施行以後、視聴覚資料を積極的に収集する図書館が次第に増加することとなる。

埼玉県には 26 台のナトコ映写機が貸与され、図書館内に設けられた視聴覚ライブラリーにより運用が行われた。移動図書館車による出張上映も積極的に行われており、子供から大人まで、多くの観客が上映会に集まる様子が記録に残っている。

各地で活躍したナトコ映写機だったが、老朽化が進み、昭和 40 年代頃から普及した日本製映写機と入れ替わるかたちで姿を消していった。



ナトコ映写機（左）とスピーカー（右）

○ ナトコ映写機の発見、そして展示へ

長らく所在不明となっていたナトコ映写機が、平成 18 年に浦和図書館で発見された。発見された当時の反響は大きく、写真入りで新聞各紙に報じられた。

発見されたナトコ映写機は、平成 27 年に資料展「さようなら県立浦和図書館」で展示され、その後しばらく外部書庫で保管された。そして埼玉県立図書館が開館百周年を迎えた令和 4 年に、今度は熊谷図書館と久喜図書館で展示され、多くの人の注目を集めた。

浦 和 図 書 館



埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-22

(昭和35年3月「埼玉県立図書館」新館舎落成、昭和45年4月「埼玉県立浦和図書館」に名称変更、平成27年3月廃止)

熊 谷 図 書 館



埼玉県熊谷市箱田5-6-1 (昭和45年7月開館)

川 越 図 書 館



埼玉県川越市新宿町1-17-1 （昭和50年10月開館、平成15年3月廃止）

久 喜 図 書 館



埼玉県久喜市下早見85-5 （昭和55年6月開館）

